

きょうかん賞

「絵本との出会い」

西田 智子さん（京都市右京区）

気がつけば七歳の娘と五歳の息子の母親である私。無我夢中の毎日で失敗と反省の繰り返し。これでいいのかと思うが本当にこれが精一杯なのである。しかし、こんな私でも子どもたちにし続けていることを、一つだけ見つけたのである。

今から四年前、八ヶ月の息子と三歳の娘を連れて息子の八ヶ月健診に保健所へ行った。人見知りの激しい娘は私にピッタリとくっついている。最後に行った部屋では何人かが絵本の読み聞かせをされていた。私にピッタリとくっついていた娘が私から離れ、輪の中に入っていった。驚いて立ち尽くしているとその中の一人が「図書館に行かれてますか？」と訪ねてこられた。正直なところ場所さえ知らないし絵本をおもちゃのように扱うので図書館の本を利用するのは申し訳ないと伝えた。すると「本の破損は気にしないで。こんなに興味を持たれているので一度立ち寄ってください。」と言われた。

とりあえず図書館に行ってみると、私が子どもの頃に読んだ本が沢山あった。まず、それを借り・・・そのうち子どもたちも自分で本を選ぶようになった。同じ本を選んできても何度も読み聞かせをした。興味があれば予約して借りた。気がつけば子どもたち・・・というより私自身に読み聞かせをしていた。子どもたちを怒った後でも読み聞かせをすると心が落ち着いてくる。しぼんだ心に夢を与えてくれる読み聞かせは私の励みになっていた。図書館でも泣いたりわめいたりする子どもたちを連れて行くのは大変だった。しかし図書館の方々がなだめて下さったり、私に励まして下さったり・・・とても親切にしていただいたおかげで図書館通いを続けられたといっても過言ではない。

“本を読めば賢くなる”という言葉を少し期待していたが、小学校一年生の娘は誤字が多い。しかし、国語の教科書のさし絵を見て、「“ももんちゃん”と一緒に絵や。」と言ったのである。“ももんちゃん”の絵本をよく読んでいたのだが、“ももんちゃん”の絵でなくても同じ作者だと分かったのだ。直接国語力につながっていなくても教科書に親しみを持ってくれたなら、もうそれだけで充分である。

これからも子どもたちは、どんどん成長していく。その中で大きな壁にぶち当たる時もあるだろう。その時、心の奥で眠っていた絵本のワンフレーズが子どもたちの支えや励ましになることを、私は切実に願っている。